

## 方法としての比較

—マルセル・モースから—

はじめに

百木 英明

最近、盛んにいわゆる「比較研究」が流行している感がある。そこには、日本の閉鎖的社会、単一民族、単一言語に代表される、日本の文化的社会的特異性からによるものであろうか。また、外の国からの輸入による学説の單なる紹介だけの段階を背景にすることであらうか。ここで改めて「比較」を考えてみる。つまり、何のため比較か。比較を試み、何を得ようとするのかである。この点を再確認し、今後どのように我々がそれを意義あるものとして考え、取り入れていくかに留意せねばならない。

今、我々はほとんど意識せずに比較という方法、日常生活においての行為をとっている。例えば、同じ品物（りんご）を買う時でさえどちらが値が安いか、色は、形はと、子供が数ある菓子からどれかを選ぶにも、各自の条件に照らし合わせ選択することになる。前提としては複数のものがあることで、二つ以上のものを互いに比べあうことが比較ということになる。その行為としての比較がなされた結果においては、より良いものが選ばれることになる。

しかし、我々が人間の社会を比較するという作業においては、日常生活での無意識の比較ということとは当然、行為それ自身としては本質において異ならなくとも、より慎重にならねばならない。それは、我々が一つの視点のみに固執して社会そのものを視た時、その社会そのものの本質を把えることが難しくなることである。人間の共同生活の

実態を把えようとする際、ある一つの視点から一つの面としての社会的側面への見方では、人間の“生活”を充分把えられない故である。実証的であろうとする社会学では、現に実在するものを、そのまま、ありのままに観察し、記録し、分析・説明することである。

しかし、過去においては理論を理論としてのみ展開し、実証としての実験、調査を軽んじる傾向があった。一方では、今日のように調査のみにたより、個別的事例や経験的事実を蒐集し、数量的分析への方向による理論化の傾向が強くなってきている。我々が実証的に比較の方法により調査する際には、単に相違点のみを指摘するのではなく、人間の共同生活の社会現象における類似性・同一性を単にそのものとしてのみの把え方ではなく、現象の内奥にある本質をも把えねばならない事に細心の注意を払う事である。それは、共同生活を営む社会での社会的紐帯を把えることである。つまり、その社会がどのような過程の下に社会的紐帯を形成してきたかであり、人々がその社会でどのように生きているかを把えることである。その社会を現に社会たらしめている土台を見てとることではないだろうか。その土台を異種の社会環境にある人間に通用する一般化の方向を目指すことに比較の性格がある。社会学が一般化を指向するのに対し、人類学は特異性を示す事に差違はあるが、人間・社会・文化を対象とする事には変わりはなく、対象をいかに把えるかが問題なのである。この点から、集約的作業の可能な小さな単位の地域社会を選択することになる。そこで、フランス社会学の基を築き、民族学への貢献も見落せぬ点のある、マルセル・モースについての「比較」を把えて見る。

## 贈 与 論

我国では未だモースの社会学上で果たしてきた役割について充分認識されているとは言えない。それは、彼自身が社会学を人類学・生物学の一分野としていた点<sup>(1)</sup>であらうし、それ故彼の理論が表面的には特殊な研究であること、叔父

であるデュルケームが前面に出ていること、更に、彼自身の控えめな慎重な姿勢によるものと思われる。が、当時の社会的背景の中でデュルケームの協力者としてのみならず、デュルケームにあつて解決しえない問題から一步進め、フランス社会学をより発展させる方法論的基礎をモースが築いた点は重要なところである。それは、社会をそのものとして視、そこでの行為をより包括的なものとして捉え、数種の異なる環境での基底的な面での比較を試み、その本質を捉えようとする視点に立脚し、論理をより科学的に整合する姿勢であつた。それが、未開社会の研究においてとつた方法故であらう。そこでモースの代表的著述「贈与論」を例としながら彼の社会学理論を検討してみる。

### 全体的社会現象

彼の問題関心は、「詩（北欧の古代伝説詩のハバマール）」の中にあると考えられる。ここでは、贈り物に象徴される人と人との心からの交流であり、神と人との相互の交換を考えている点である。当時のスカンディネヴィアの文明領域では、理論的には自発的に進物の形式として交換や契約がなされるが、事実では贈り物が義務的に与えられ返される点に注意し、研究の対象としたことである。そこで彼は、未開・太古ともよばれる社会における契約体系と経済的給付に注目し、それ自体に、あらゆる種類の制度（宗教的・法的・道德的（政治的・家族的）・経済的）や審美的現象、贈り物の交換の制度化された形態としての現象が、一挙に△全体的▽社会現象に表われているとし、これを提起し、その事実を当時に先行する社会に求めたのである。

彼は特に、これらの様相の一つとしての贈り物の形式における「給付」が、表面上は任意的でありながら、実は、拘束力・打算的な性質であることを考察するのに力を注いだ。つまり、取引に伴なう様々な形をとる給付の行為における拘束性を問うている。更に、交換の必要形式での諸原則を指摘する中でも、「おくれた、古い社会類型において贈り物を受けた場合に、その返礼を義務づける法的・経済的規則はいかなるものか。贈られた物のなかにあつて、受贈者にその返礼をなさしめるのは、いかなる力なのか。」<sup>2)</sup>を彼は問題とした。それを探るために適用したのが比較の

方法であり、地域を限定し、領域を選択し、主要な法典（意識を読み取ることのできる法）のみを選択対象として、多くの事実から正確な回答を示し、それとの関連する領域への研究の方向を示そうとした。そこで出発点となる三つの問題点を提示した。

- (一) 契約の倫理の恒久的な形式
- (二) 物の法が、人の法に結合されている態様の関係
- (三) 物の法が交換を支配してきた。

つまり、彼の問題とするところは、一つに「現代の社会に先行する社会」における交換と契約の現象を叙述し、人類的取引の性質・機能のメカニズムを事実の類型により明らかにし、同時に、取引において働く道徳と経済を検討することとした。更には、その道徳・経済が、当時の社会において基底的に機能していることを証明することにより「人類の岩盤の一つを発見し」、現代における法・経済の危機が提起する問への道徳上の結論を類推しようとした。

何故にモースにあって経済と法が取り上げられたかを考えてみると、近代になり産業形態において分業が発達してくると、人と人を結ぶ紐帯が緩むようになってきた。デュルケームはそこで、古代の法に溯源し、そこでの社会的紐帯としての法の性格に注目した。社会を社会として一定に保つべき復原的制裁としての法の性格を考えたのである。モースが更に、道徳と経済を考えたことは、デュルケームにおいての分業が進展する中での新しい連帯を職業組合に求めた姿勢を受けついでのものと考えられる。分業が発展し、資本主義社会が進展するにつけ、人と人が直接結びついていった紐帯が、物と物により人間同志が結びつけられるようになってきたのである。正に、この点にマルセル・モースの危機意識からくる問題としての「贈与」が考えられたのではないだろうか。それを、地域的色彩を失なうことのないような一面的・平板の比較を放棄し、総体的に諸種のシステムを対象とした。

このため、モースは単純な社会（古代社会）における贈り物の交換の意義を、原始的交換に共通する基本的特徴そ

のものとして客観的に認識し、その現象を問題とした。そこでの交換は、財・富・生産物の単純な交換でなく、

(一) 契約するのは個人ではなく集団

(二) その際に立ち合うのは、集団としての家族・氏族・部族か、その長を媒介とし、いわゆる倫理的な人格である。

(三) 交換するものは、経済的に有用なものだけでなく、礼儀・饗宴・儀式・軍事的奉仕・婦女子・祭礼・市であること

(四) この給付・反対給付は、任意的形式の下でなされるが、厳密には、義務的なものであり、不履行時には、公私の闘争に発展しかねないものである。

ことをあげ、これらを「全体的給付組織」<sup>(4)</sup>と称し、オーストラリアや北西部アメリカにその形態を認める。トリンギト族・ハイタ族などの社会に見られるポトラッチの慣習はよく事情を示している。ポトラッチは、本来は「食物の供給・消費する」の意味であるが、裕福なこれらの部族は、夏蓄わえたものを定住する冬期に、絶え間ない祭礼とし定期市や饗宴で過ごす。ここでは、氏族・婚姻、シャーマニズム、トーテム氏族の祖先を祭る儀式、経済的給付、政治的地位の決定が混淆し、解きはぐし得ない網を形成している。しかし、ここでの注目すべき著しい特徴は、部族の有力者が饗宴において自己の威力を誇示し、相手を圧倒するために破壊の競争を挑み、身分階層の確保のための闘争として相手はそれを受ける義務を有し、受け取った以上のものを返さなければならぬものとする「活動を支配する競争と敵対の原理に基づく、『競覇型の全体給付』と名付けることである。これらの制度は他地域にもその事実を見出したが、贈り物の返礼を義務づける道徳的、宗教的契機をポリネシアに求めた。そこでの贈与の組織は人生儀礼としての出生祝、割礼、疾病、成女式、葬儀等に現われる。ポトラッチの本質的要素としての「富により授かる名譽・威信」と、「贈り物の返礼をなすべき義務」とが認められる。サモアでは出生祝の際に oia (オロア) と tonga (トング) —— 父・母方の財産 —— を交換するが、以前より裕福にならずとも、出生に際しての財貨の山を見て満足し、

名誉と考へた。また、これらの贈与は、義務的性質のものであり、子供は財産相伝の媒介としての役割を果たし、恒常的性質として交換が続けられる。マオリ族の法や宗教上の觀念においては、*Teonga* (タオンガ) が、呪術的、宗教的、靈的力の媒介物として、人、氏族、土地に密接に結合し、返礼の義務が不履行の時はそれを受けた個人を殺す力を含んだものとしてある。これは *Teu* (ハウ) とよばれ、物の靈ということであり、マオリ族の法曹家の説明では、「タオンガや嚴密な意味での一切の所持品は一つのハウ、すなわち一つの靈的力をもっている。わたくしはあなたからタオンガを貰い、わたくしはそれを第三者に贈る。その第三者はわたくしに別のタオンガを返してくれる。かれはわたくしの贈り物のハウによってそうせざるをえなくなるからである。また、わたくし自身もあなたにその物を贈ることを義務づけている。なぜなら、わたくしは、實際、あなたのタオンガのハウの所産であるものをあなたにお返しする義務があるからだ。」<sup>(5)</sup> ということである。つまり交換された物は、贈与者の手から離れた時でも一部を含んだものとしての生命なきものではなく、その贈り物が人を義務づけ、相手を支配する力をもつ一種の個体として保有者が独自のものを返さないかぎり、タオンガ、ハウは結び付くのである。返礼がなされると、その贈与者は最初の贈与者に權威と勢力を持つことになるのであり、ハウは古巣に返ろうとするのである。これらが、サモアやニュージランドでの、富、贈り物の義務的循環を支配する觀念である。このような事実から重要な二点をモースは指摘する。それは

(一) 物の移転により生ずる法的紐帶の性質を知る。それは、物が靈をもち、靈に従属する以上、靈と靈との紐帶であつて、自分自身の一部を与えることであること。

(二) 義務的贈答制としての返礼の義務の性質。

である。それは、物の贈答が、それを行なう当事者間では、その靈の一部を受けることであり、長くその物を保持することは生命にまでかわる危険なことである。あらゆる意味において、人から出たものは受贈者に対して呪術的宗教的支配をおよぼし、人格としてその物は、古巣に他の等価物をもたらず性格をもつことになる。

しかし、全体的給付は受けた物への返す義務だけでなく、贈り物を与える義務と受ける義務、この三種の義務により特徴づけられるのである。マオリ族やダーク族では、氏族、世帯、集会、客は歓待を拒んだり、贈り物を受けとらぬことや、婚姻、血族としての関係を締結しないことができないような受ける義務と、与えることを拒否し、招待を怠るような行ないは、戦いの布告をするのと同様としての与える義務が見い出せる。つまり、親交と協同をより確かなものとするために、人は物を霊的な紐帯としての所有権を持ち贈与するのである。そこには物——個人——集団の間の精神的紐帯が存在しているのである。

以上、モースについての交換を考察してきたが、そこでの交換が物と物の交換での人間不在の形に、より人間の入り込んだ贈与の中にデュルケームの言う有機的な連帯を望んだといえる。モースの交換における行為現象は、宗教的、法的、道徳的、経済的等のあらゆる機能をすべて含む制度としての全体的社会現象が、経済的行為としての経済的効用の交換である経済的交換（部分的）よりも $\wedge$ 全体的 $\vee$ 社会現象として、集団間になされる多様な意味を含んだものとして、それらが、現実存在、作用している事実を捉え、 $\wedge$ 全体的社会事実 $\vee$ の概念を提示するのである。

彼の「贈与論」の基盤を築いているのは、「呪術の一般理論」であろう。以下において彼の方法を探ってみることにする。紙数の制限から細かい点は省かせていただが、呪術的行為を全体的にその過程、要素を捉え、細かく分析している。彼はここで、抽象から具体的な方向へ、方法から事例への方向により彼は論を進めている。彼は、個々の要素を抽出し、それらが必然的に密接に相互に結合している点を明らかにし、従前の呪術における行動のみ認めなかったのに対し、呪術の現象を儀礼として定義し、呪術師の社会的役割とその社会での位置と意義を明らかにし、なによりも、社会的に形成される集合的な信念に生きた、どろどろとした日常的な姿を視てとうとうとした。中心的概念としては、マナに代表される。それは一つの力、存在のみでなく、一作用、一状態でもあるし、人間の行為に、祖先の靈魂や自然の精霊のもつ力として、共感的な存在の相互間に生み出された靈的作用として、環境の中で機能すること

とを事実として扱えたものである。つまり呪術にあらわれる社会の姿を見てとろうとするものである。一方でその社会に生きる人々に課せられるものとしてタブーが存在する。タブーは社会を維持していくための強い強制力をもった観念である。呪術の社会維持のための積極的儀礼と、少しづつ変わる消極的な面を考察した。集団としての彼らの行動意識を追求することとし、社会と個人の分離し得ない状況を捉えようとし、心理学との連繫を指摘した。人間の思考が築かれる過程を諸々の社会との接触を通じて示すことを願い、「身体技法」の概念を示してくる。人間がそれぞれで社会で伝統的な態様でその身体をどのように用いていくかを示したものである。歩き方や泳ぎ、道具の使い方までも、その社会の独自の慣習を持ち、身体の姿勢のどれもが同じような型を持っていることとした。習慣は、個々人や彼らの模倣とともに変化するだけでなく、社会、教育、しきたり、流行と共に変化するとし、普段は精神と反復能力のみ見出しうるところに、技法と集合的な実践の理性を見い出そうとした。一つの動作を考察する際には、三重の視点へ全体的人間<sup>(6)</sup>の視点の必要性を示し、又、教育の概念と模倣の概念の重なる余地も離れ難いものとし、模倣行為の中には、社会的なもの、心理学的なもの、生物学的なものが見い出されるところとした。技法が伝達されるには伝承がなければならず、そこにおいて動物とは区別される。それも口頭による伝達によるものである。身体こそが人間の道具であり、秩序のうちに、不断の適応を通してその社会で占める位置に追求される行為であって、何よりも、その社会にどう適応していくかが問題であり、そのため、彼は、一つの社会を一つの身体と考え、型を慣習と考えた。

#### まとめ

以上のことからマルセル・モースの理論を検討してみると、彼の主眼点としてはやはり「全体的社会事実」である。つまり、社会そのものをあくまでも、あるがままのものとして見ることである。その際、その見方はデュルケー



ルの影響によるものであつても、自分の眼で、より正確にみることであり、より具体的なものとして、多角的にその集合的なものを研究し、人間と人間とのかかわり合いを研究の対象とすることであつた。その一つとして、生物学的側面より考えられる分類における類と種の関係である。つまり、近代市民社会の確立と共に現われる個人としての個の確立が意識されたその背後に、より全体としての類としての人類が考えられ、その中間項として種の考え方を示してきた。このことは、単に分類上の問題にとどまることなく、当時のヨーロッパにおける危機感からくる秩序と安定を求める場としての種も考えられよう。そのものをより具体的に視、描写することをその方法の基礎として、それも社会を分解して分析するのではなく、全体を全体として考察することによりのみ、その本質が把握されることができるとした。その為に、諸々の差異を取り除きその根源を原型とすることを目指した。そこでより小さな社会を対象として研究することで、そこでの徹視的眞実を巨視的社会へも通用できる普遍性を、有効性を視る視点として比較の方法を用いた。そこでは、物↕人↕行為を視ようとした。物のもつ力としての人間への支配と、人間が仮面を付けることによりそこでの位置、機能を行使し、社会的紐帯を結ぶ方向への努力として現われる。同時に、当時の西欧社会では、人間を「経済的動物」に変えてしまった事から、考え理性のある人を望んでいたことと考えられる。それらを、人間の内からの方向からも求め、それを心理学と社会学の融合する領域としての心理学との連繫を考え、集合的心理としての民族学の方角への道を開拓し、その他の隣接科学との協力により、一面的でない人類学を考えた点に彼の意図するところがあつたと考えるし、デュルケームにあつては拒否してきた心理学への接近により、新たな方向を示した。ただ、モースの理論においては、実際に現地を踏んでないこともあり、非常に具体的ではあるが、一原型を把える類型化としての域を出ていないように思われる。同時に、歴史の視点もないように思われる。文字を持たない社会が、分節不可能な一社会を未開社会と考えられ、歴史はないと言われるが、それでも彼らなりに疾病・貧困・戦争・飢餓を経験はしている。記録には残っていないが未開にも歴史は存在する。記録に残っていない故、「近代化」の波をまと

もに受けてしまう今日の状況で、その間に立たされる我々である。現地を踏まず、現地を踏んでも、「安楽椅子」での研究活動でなく、その人々との間にコミュニケーションがより重要である。私の滞在していたザイルでも、近くに設備と医師の整った病院があっても、呪術師を求める姿は未だ残っている。一方で、スワヒリ語の医学書への翻訳も行なわれている。我々がどこに位置するかは、更に重要な点となってきた。人類学での調査の方法と、その社会に密接した方法を有意義に取り入れながら日本の社会にも適用せねばならない。社会学における数的処理における分析でも、その数字の意味と背景を考えねばならない。

#### 〈引用文献〉

- (1) 『意識をもち社会的交渉を有す生物とみなす学問の総体』としての位置づけをしている。M・モース「社会学と人類学 II」(p. 5). 弘文堂
- (2) Marcel Mauss, "Sociologie et Anthropologie" 1973, (p. 148). P. U. F.
- (3) M・モース 有地亨訳「社会学と人類学 I」(p. 255). 弘文堂
- (4) 同「(p. 227).
- (5) 同「(p. 239).
- (6) 同 II (p. 36).

#### 〈参考文献〉

- M・メルロー・ポンティ 竹内芳郎 他訳「シーニュ1」みすず書房  
 小泉・小山・峰島編「比較思想のすすめ」ミネルヴァ書房  
 W・H・グッドイナフ著 古橋政次・寺岡 襄訳、「文化人類学の記述と比較」人類学ゼミナール 5 弘文堂  
 E・デュルケム、田原音和訳「社会分業論」青木書店  
 富永健一編「経済社会学」(社会学講座 8) 東大出版会

C・レヴィーストローヌ 大橋保夫編「構造・神話・労働」みすず書房

(ももぎ ひであき、本学助手)